

【本研究の背景と目的】

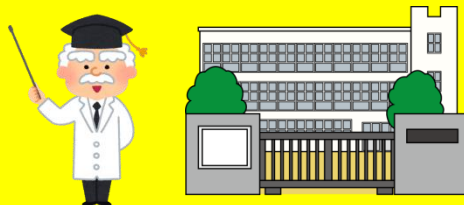
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（中央教育審議会, 2010）では、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である」と指摘されている。

しかし、予備調査（平成24年度専門研究D「特別支援学校（知的障害）における学習評価の現状と課題の検討（予備的・準備的研究）」）から、共通の観点を定めたり、評価の時期や方法を共有化したりする等、組織的に取り組み、教育課程の改善にまで至る学校は少ないことが明らかになっている。

そこで、本研究では、知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策を明らかにするため

- ① 観点別学習評価の在り方
- ② 学習評価を学習指導の改善に活かすための工夫
- ③ 学習評価を児童生徒への支援に活用する工夫
- ④ 組織的・体系的な学習評価の推進

以上の4つの研究の柱を立てて検討を行った。



【研究方法】

- 学習評価に関わる用語や概念の整理
- 研究協力機関の特色ある実践データの収集と分析
- 全国の特別支援学校（知的障害）を対象とした調査



【結果および考察】

① 観点別学習評価の在り方

研究協力機関の実践では、学習評価の4観点を基に、児童生徒の学習活動と期待される姿を想定した評価規準を設定することにより、目標や指導内容、手立ての妥当性が高まることが報告されている。

② 学習評価を学習指導の改善に活かすための工夫

研究協力機関の実践では、単元の指導計画に沿って評価規準を設定し、児童生徒の学習状況の評価をするための課題の洗い出しをすることが、「指導の見直し」につながるという実践があった。指導と評価の一体化として大変重要な実践であると考えられる。

③ 学習評価を児童生徒への支援に活用する工夫

自己評価、相互評価やほめる仕掛けづくりにより、児童生徒の自己肯定感を高めると共に興味・関心や意欲を高め、児童生徒が自らの次の課題に気付くことを促すことが示された。

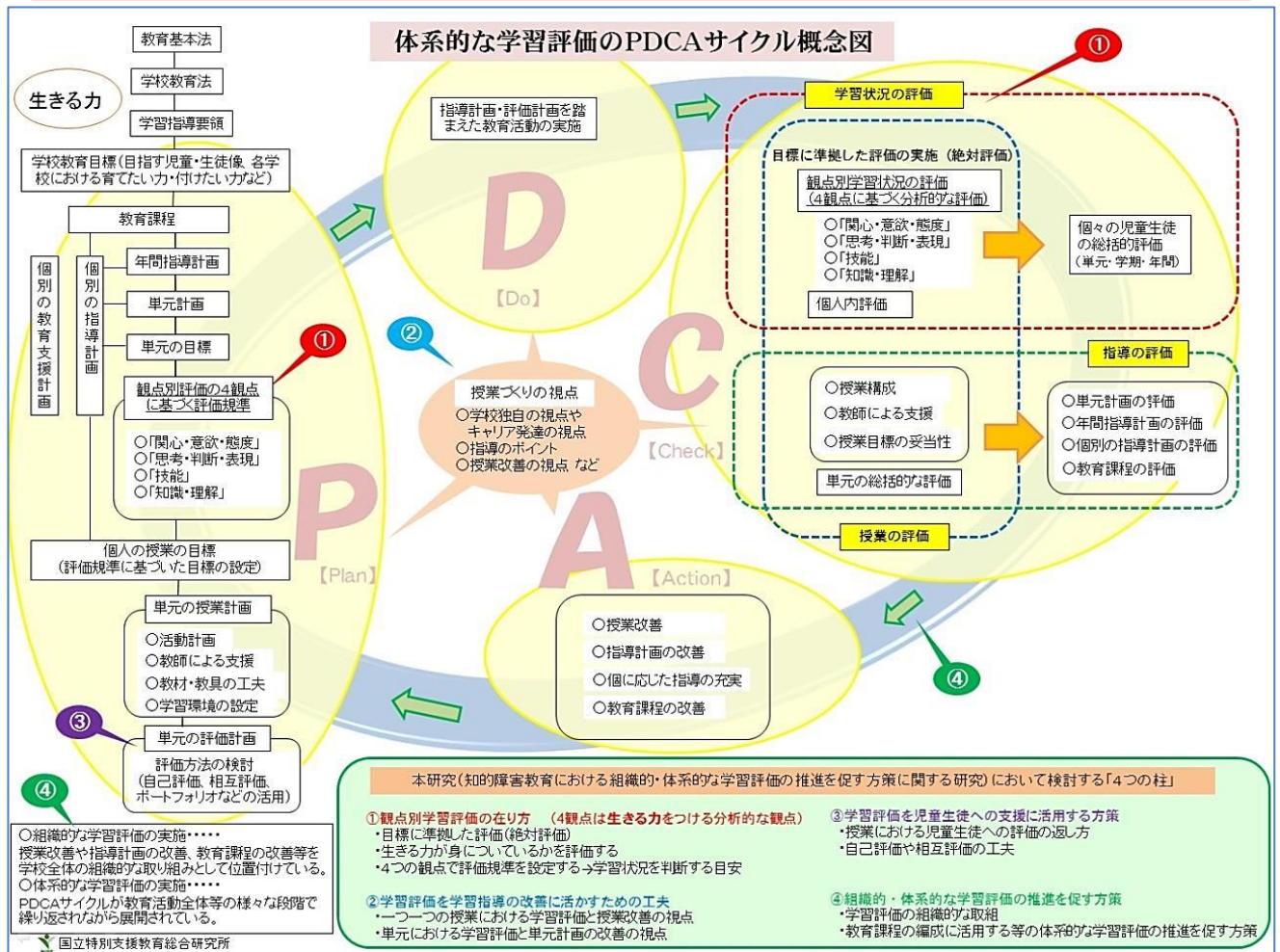
④ 組織的・体系的な学習評価の推進

学期ごと等、まとまった期間を一括する形で学習評価を実施し、児童生徒へのフィードバックを中心に行う「一括・包含型」では「授業—単元—1年間の総括」といった関連性は希薄で、教育課程の改善にまで至ることは少なかった。学習評価を教育課程の改善につなげるPDCAサイクルを再検討・再構築し、妥当性・信頼性の高い指導内容や指導方法の確保及び学習評価の質の向上に取り組んでいくことが今後の課題である。

【成果】

- ◆ 生きる力を育成する観点別学習評価の在り方、指導と評価の一体化、児童生徒の発達を支援する学習評価の活用の在り方について提言し、組織的・体系的な学習評価を促すためのPDCAサイクルを検討する中で「体系的な学習評価のPDCAサイクル概念図を作成した。また、4つの研究の柱に即してそれぞれの課題を整理した。
- ◆ 中央教育審議会への文部科学大臣の諮問文「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」（文部科学省, 2014）では「教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた、新しい時代にふさわしい学習指導要領等の基本的な考え方」の検討が求められており、本研究の「体系的な学習評価のPDCAサイクル」に基づいて学習評価を進めることが参考となると考えられる。

本研究では、組織的・体系的な学習評価に関わる要素を網羅的に検討し、「体系的な学習評価のPDCA概念図」を作成した。特にCheckの段階は、「学習状況の評価」「授業の評価」「指導の評価」に分けることで、重層的に「評価」を捉えて説明した。



観点別評価を活用した研究協力機関の実践からは、観点別評価を活用することで、学習状況の到達度を分析的に捉えることができ、指導内容の改善・精選が進むことが示唆された。その際、「観点」の関係性を整理することが重要であることが分かった。

(分析的にみる) 観点別学習評価の観点

	算数	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
内容構成の視点(観点)	数量の基礎、数と計算				
	量と測定				
	図形・数量関係				
	実務				

「観点別学習評価の4観点」と「内容構成の視点」の関係

学習評価の観点には、分析的な評価の観点である「観点別学習評価の4観点」と「内容構成の視点」の2つがある。前者は、ある授業や単元等における子どもの学習の姿を分析的な観点によって観るものであり、後者は指導内容のまとまりや構成内容や段階性を示すものである。前者を横軸、後者を縦軸として立体的な学習評価を行うことで、より深く子どもの学びや伸長を捉えることができる。

研究協力機関の実践では、観点別評価の4観点を導入することにより、指導目標の妥当性について指導案段階から検討するサイクルが作られていた。

例えば「思考・判断・表現」を評価するためには、「思考・判断・表現」しながら主体的に活動するような場面が授業の中に準備されなければならない、それを授業構成の中に組み入れた指導案に再構成するなどがあった。

こうした気付きが、指導目標や、指導内容、手立ての妥当性を意識した授業計画・改善につながり、指導と評価を一体的に進めることとなる。また、観点別評価を活用すると、学習状況の到達度を分析的に捉えることができ、指導内容の改善・精選が進むことが研究協力機関の実践より示唆された。



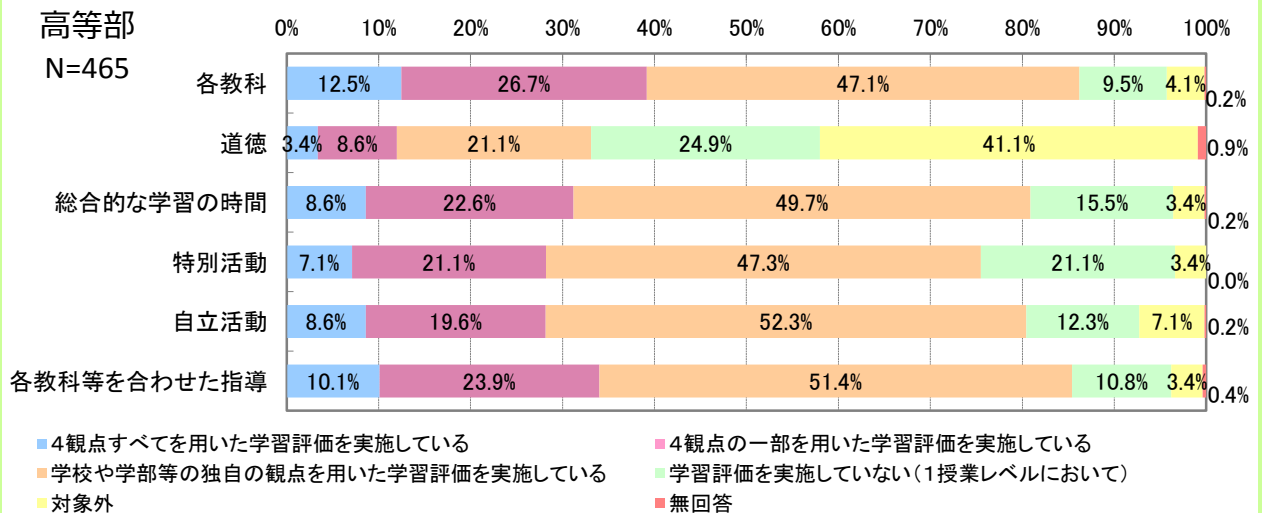
【全国調査】

特別支援学校（知的障害）における組織的・体系的学習評価の実施状況に関するアンケート調査結果概要

【調査の目的】

本調査は、平成25～26年度専門研究B「知的障害教育における組織的・体系的学習評価の推進を促す方策に関する研究」の一環として、特別支援学校（知的障害）において、どのような学習評価が実施されているのかを明らかにすると同時に、教育水準を結果の側面から保障していく際にどのような学習評価の工夫が考えられるのかを明らかにすることを目的として実施した。

Q2. 設置されている各部の各教科等において、「授業」での4観点をを用いた学習評価の実施状況について、以下の選択肢からあてはまるものを1つ選んでください。



【学習評価の観点の設定について】

「学校や学部等の独自の観点をを用いた学習評価を実施している」学校は約50%。「4観点の一部を用いた学習評価を実施している」と回答した学校は約20%。「4観点すべてを用いた学習評価を実施している」と回答した学校は約10%であった。

【学習評価の実施グループについて】

「学部全体で統一して行っている」と回答した学校は50%。「学校全体で統一して行っている」と回答した学校は10%前後。同様に「特定の授業グループのみが行っている」と回答した学校も10%程度であった。

【学習評価を集約するシステムについて】

授業レベル、単元レベル、1年間の総括レベルと評価スパンが長くなるにつれて「集約する会議・委員会等を設定している」とする割合や「特定の責任者により集約している」とする割合は高くなっていった。

【学習評価の集約書式等について】

授業レベル、単元レベル、1年間の総括レベルと集約するスパンが長くなるにつれて書式の共通化が図られる傾向が見られた。一つ一つの授業や単元よりも1年間の総括のように長期間にわたるものをまとめる書式が統一性を持たせやすいと考えられた。

【調査の対象】

平成25年5月1日現在、全国特別支援学校知的障害教育校長会（以下、全知長）に加入する585校の内、開設準備中の学校3校を除く582校の特別支援学校（知的障害）を対象とした悉皆調査。

【調査の期間】

調査期間は平成25年11月18日から平成26年1月10日までの約2カ月間。

【調査の方法】

全知長事務局より、各都道府県の代表にメール添付で質問紙を送信。各都道府県の代表より全知長加入の各特別支援学校へ質問紙を転送。回答専用e-mailアドレスへ各特別支援学校から直接返信を行ってもらった。

【調査の項目】

本調査では、次のⅠ～Ⅴの5区分（17項目）についてアンケートを行った。

- Ⅰ.学校及び回答者について（1項目）
- Ⅱ.授業における観点別評価等について（4項目）
- Ⅲ.単元における観点別評価等について（4項目）
- Ⅳ.1年間の学習の総括における観点別評価等について（4項目）
- Ⅴ.学習評価の活用等について（4項目）

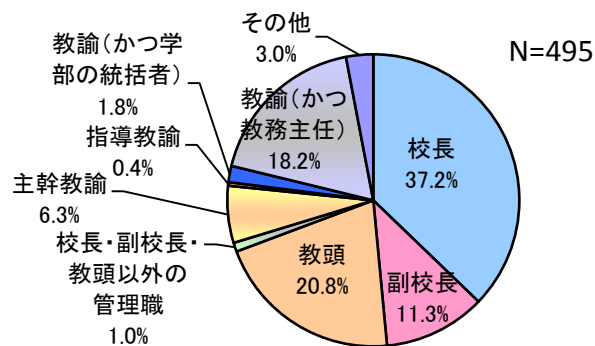
【回答の状況】

1.回収率

全知長に加入する582校中、495校より回答を得た。回収率は85.1%。

2.回答者

学校長もしくは学校全体の教育課程を統括する立場にある者を回答者として指定。回答者の職種等は以下の通り。



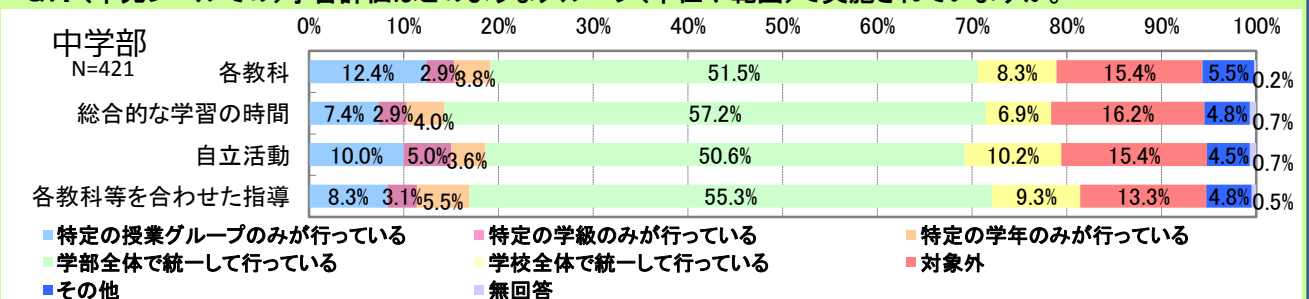
回答者の職種については、4割弱（37.2%）が校長による回答であり、管理職（校長、副校長、教頭、それ以外の管理職）からの回答が全体の約7割（70.3%）を占めた。

その他の3.0%には、研究主任や学習指導を統括する立場の役職（学習指導部長、学習指導主任等）が含まれていた。

【回答の結果】

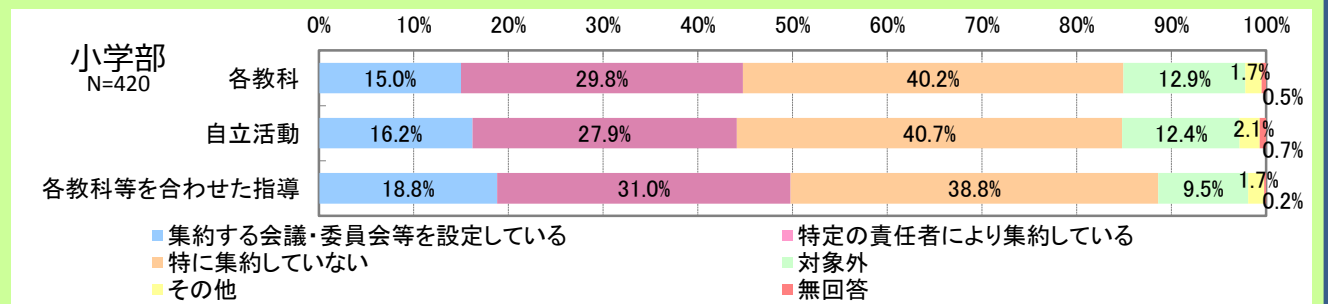
Q2～Q13までは、授業レベル、単元レベル、1年間の総括レベルでの学習評価の観点の設定、学習評価実施グループ、集約システム、書式等について質問した。

Q7. (単元レベルでの)学習評価はどのようなグループ(単位や範囲)で実施されていますか。

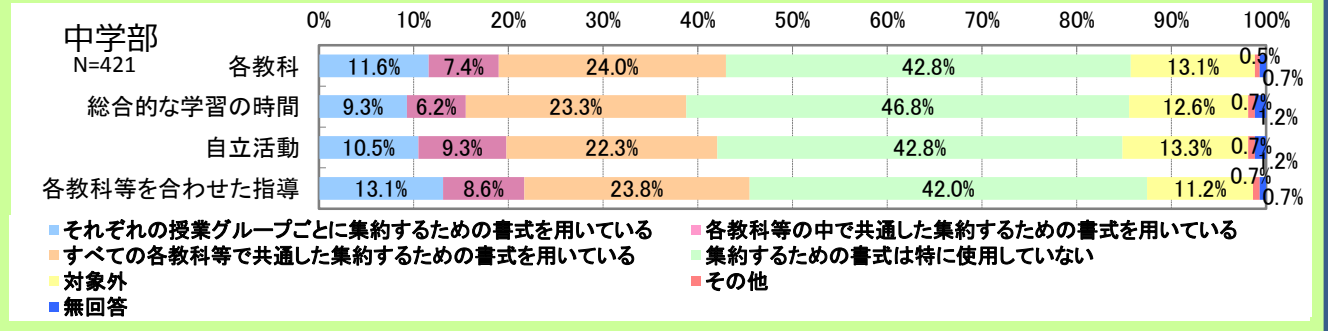


学習評価を集約するために会議・委員会を設定したり特定の責任者により集約するシステムは授業レベル、単元レベル、1年間の総括レベルそれぞれで5割前後の学校が設定。集約書式についても同様の割合で何らかの形で定めたり、共通化を図っていた。

Q8. (単元レベルで)学習評価を集約する会議・委員会等のシステムは設定されていますか。

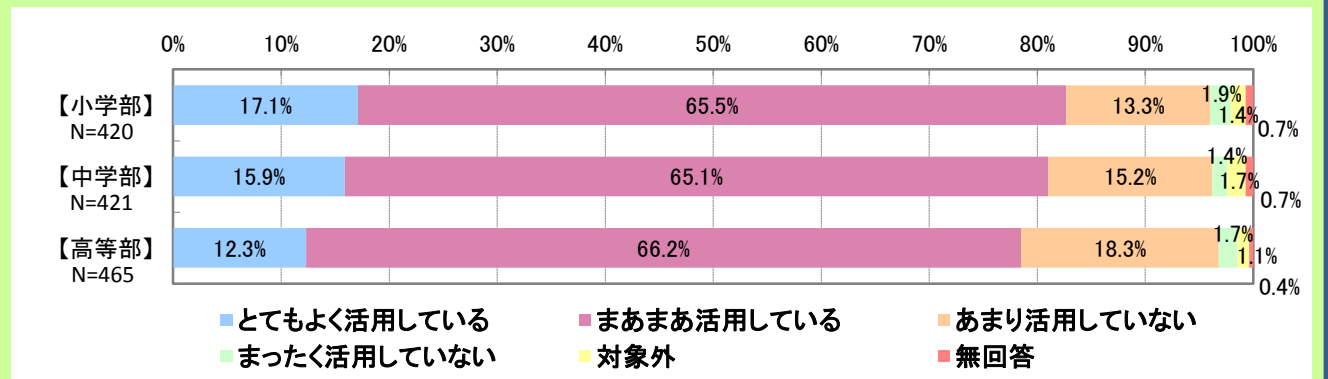


Q9. 学習評価を集約するための書式等(評価記録用紙, ポートフォリオ, 評価メモ等のツール)は使用されていますか。

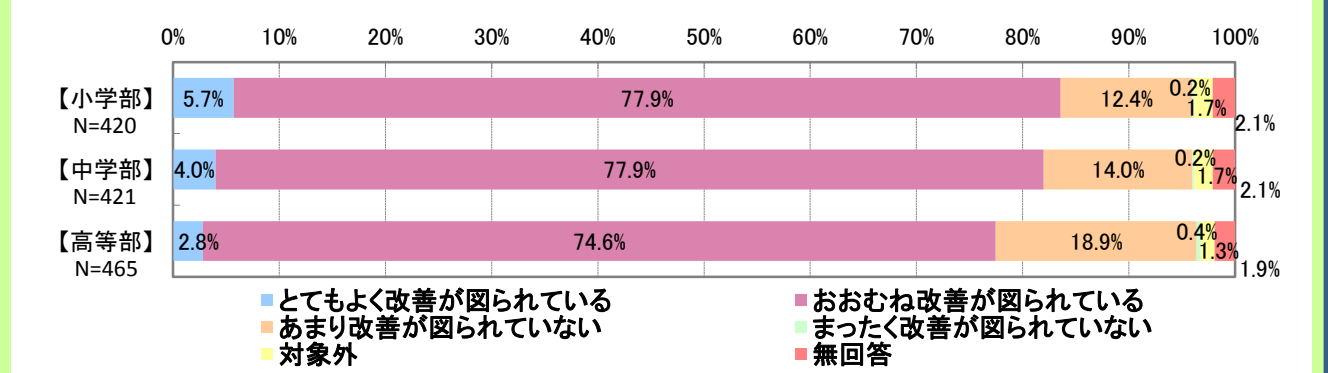


学習評価は約8割の学校で「授業改善」に活用されていた。中でも、小学部は高等部よりも有意に活用が図られていると回答されていた。また、「授業改善」そのものも約8割程度の学校で図られていると回答されていた。

Q14. 1) 設置している各部において授業改善に取り組む際、学習評価はどの程度活用されていますか。

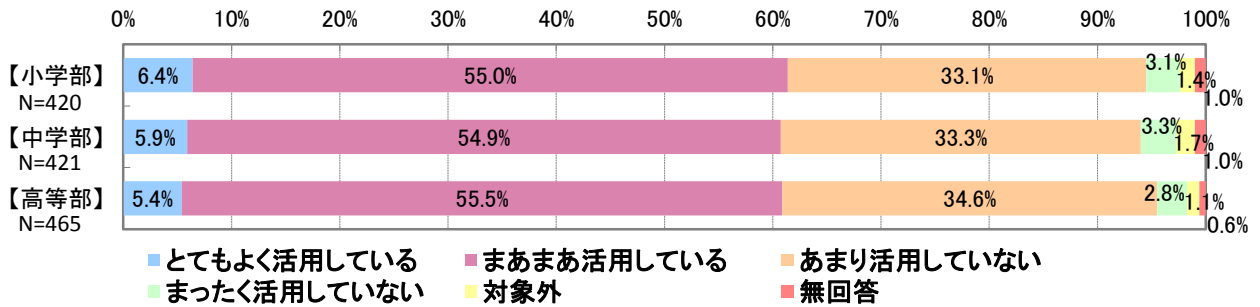


Q14. 3) 設置している各部において、授業改善はどの程度図られていますか。各部の全体的な状況として、以下の選択肢からあてはまるもの1つを選び、表内に番号をお書きください。

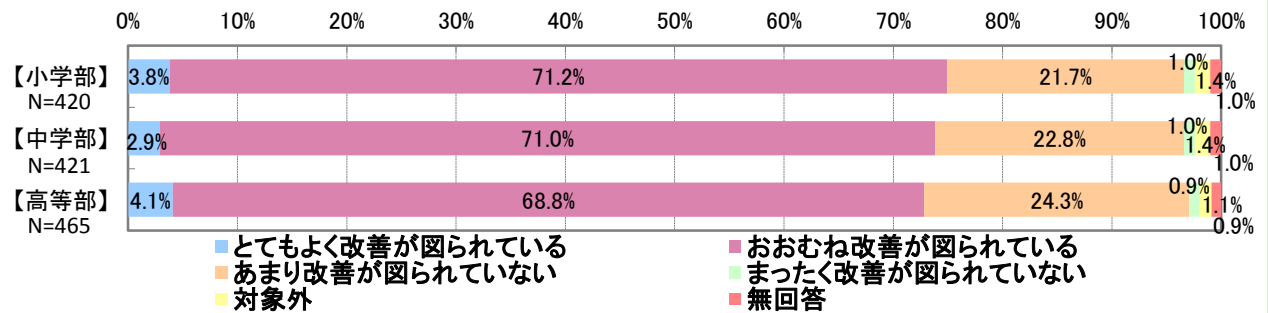


学習評価は約6割の学校で教育課程改善に活用されていた。しかし、「授業改善」ほどは「教育課程改善」には活用されていないようであり、活用の在り方や方策についての具体的な知見を必要としていると考えられた。

Q15. 1) 設置している各部において、教育課程改善に取り組む際、学習評価をどの程度活用していますか。各部の全体的な状況として、以下の選択肢からあてはまるもの1つを選び、表内に番号をお書きください。

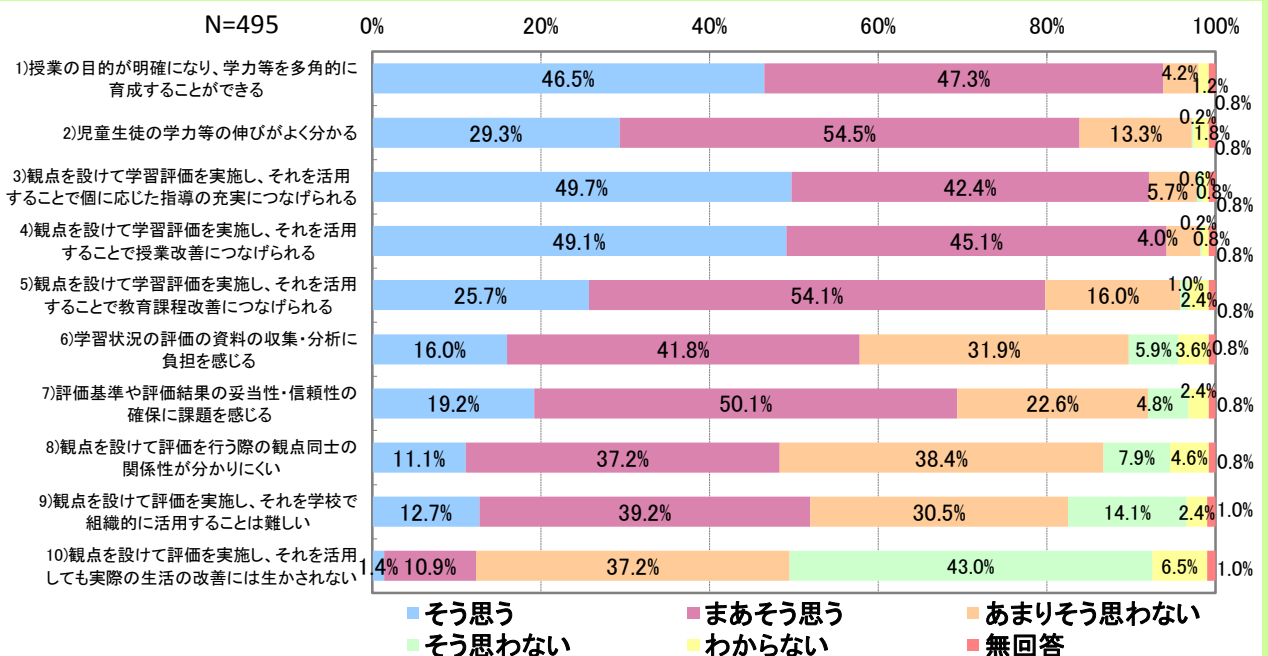


Q15. 2) 設置している各部において、教育課程改善はどの程度図られていますか。各部の全体的な状況として、以下の選択肢からあてはまるもの1つを選び、表内に番号をお書きください。



特別支援学校（知的障害）では、観点を設けて学習評価を実施することで得られる成果や効果、考えられる課題や困難等に対して肯定的（積極的）な回答を示していた。特に「個に応じた指導」や「授業改善」、「学力等の多角的育成」で顕著であった。

Q16. 観点を設けて(4観点到限らず)学習評価を実施し、それを活用することで、学校全体としてどのような状況になった(または「状況になる」と感じられますか。以下の1)~10)の各項目のそれぞれについて、選択肢よりあてはまるもの1つを選び、表内に番号をお書きください。



【組織的・体系的な学習評価の様々な工夫】

特別支援学校（知的障害）では、学習評価を組織的・体系的に推進するに当たり、以下のような7つの要因のもとに、様々な取組や考え方の工夫を行っていた。

I. 組織的・体系的学習評価の推進に直接的に関わる7つの工夫要因

1. いつ学習評価を行うか

- ① 評価を行う時期（タイミング）
毎日、授業後、下校後、単元終了後、学期ごと、前期・後期、年度末
- ② 時間設定の方法
評価週間を設定する、成績検討週間を設定する、成績会議日を設定する

2. どこで学習評価を行うか

- ① 検討の場・形態
学級担当者会、学年会、ブロック会（複数学年の集まり）、学部会、個別の指導計画ケース会議、学部研究会、授業研究会、教科会、教育課程改善プロジェクト等

3. 誰が学習評価を行うか

- ① 評価担当者（評価に関する記録の作成者）
授業担当者（担任以外）、担任、学年の指導者全体、学部の指導者全体、当該学部以外からの参観者、外部の関係者（現場実習先の関係者）等
- ② 評価確認者（評価に関する記録を確認する人）
授業担当者（担任以外）、担任、学年の指導者全体、学部の指導者全体、教務主任、ミドルリーダー、管理職

4. 何のために学習評価を行うか

- ① 学習評価の考え方や指針
学習評価の考え方に関する指針を示す、学習指導についての構造図を示す、評価例を作成する、評価書式への記入に関するマニュアルを示す

5. 何を対象として学習評価を行うか

- ① 評価対象
児童生徒の学習行動、児童生徒の変容過程、日常生活や地域生活への応用・般化

6. どのように学習評価を行うか

- ① 評価の観点の内容
キャリア教育の視点、キャリア発達の視点、基礎的・汎用的能力の4観点、学校独自の観点等
- ② 評価の観点の設定方法
評価の観点を全校で統一する、特定の評価の観点へ比重を置く、授業の主旨者により観 points の提示を行う、評価の観点の妥当性を検討する
- ③ 評価の妥当性の向上
複数の教員による判断の一致、評価の根拠の検証を行う、評価規準に照らした評価を行う等
- ④ 評価の補助資料とするもの
日々の実践記録、日々の活動記録、日々のエピソード記録、映像記録、授業参観者による評価シート、週指導計画、独自の検定、児童生徒の自己評価、児童生徒の相互評価等
- ⑤ 具体的な評価の方法
行動レベルでの評価、指導目標を踏まえた本人の実現状況の丁寧な文章表記、肯定的評価、児童生徒自身が分かる評価、到達度評価、個人内評価、全員参加型討議でのKJ法による評価等

7. その他の学習評価に関する工夫

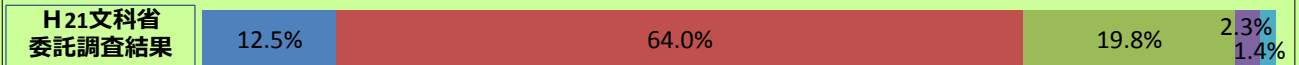
- ① 書式・項目の設定方法
個別の教育支援計画・個別の指導計画・通知票の関連の強化、個別の指導計画・通知票の一体化、個別の教員支援計画・個別の指導計画の一体化、個別の指導計画と年間指導計画の関連付け、児童生徒の実態に応じてカスタマイズした評価表、評価記録様式の統一等
- ② 省力化・負担軽減
評価記録項目の量や内容の調整、評価スパンの調整、校内LANの活用、サーバーでのデータ保管
- ③ 視覚的分かりやすさの工夫
評価のレーダーチャート化、目標を一覧表にしておく
- ④ 職場環境・雰囲気づくり
常に感じたことを話すことのできる雰囲気、よりよい授業のために率直に話し合える雰囲気づくり

Q16の調査項目は、平成21年度に文部科学省が委託した「学習指導と学習評価に対する意識調査」を基に作成。調査対象や各質問項目については、厳密には同一となっていないものの、調査対象を全国の小・中・高等学校の教員（全国から無作為抽出された小・中・高等学校の教員、各2000人：合計6000人）とした回答結果と比較しても特別支援学校（知的障害）では、類似の質問項目において、よりポジティブな回答結果を示している状況が伺えた。一人ひとりの児童生徒の実態把握や学習状況・生活状況等を踏まえた、適切な指導及び必要な支援を展開していく特別支援教育ならではの、きめ細やかな対応の特徴を反映しているものであると捉えられた。

H21年文科省委託調査結果とH25特総研調査結果の比較

授業の目標が明確になり、学力などを多角的に育成することができる

■ そう思う ■ まあそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない ■ 無回答



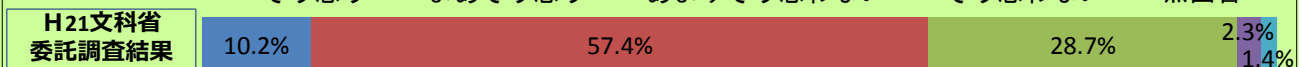
授業の目標が明確になり、学力等を多角的に育成することができる

■ そう思う ■ まあそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない ■ わからない・無回答



児童生徒の学力などの伸びがよく分かる

■ そう思う ■ まあそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない ■ 無回答



児童生徒の学力等の伸びがよく分かる

■ そう思う ■ まあそう思う ■ あまりそう思わない ■ そう思わない ■ わからない・無回答



【研究組織】 研究代表者：尾崎祐三

研究分担者：松見和樹，涌井恵，武富博文，横尾俊，神山努

【関連情報】

※本リーフレットのより詳細な報告書について

以下のURLより詳細な報告を行っていますので、ご参照ください。

<http://www.nise.go.jp/cms/keywords/1.-.kwstring.7.html>

※国立特別支援教育総合研究所メールマガジンについて

特別支援教育の最新情報をメールマガジンにてお届けしています。以下のURLよりご登録ください。

<http://www.nise.go.jp/cms/6,1775,13.html>

※インクルーシブ教育システム構築支援データベースについて

以下のURLより合理的配慮の実践事例と関連情報をお届けしています。

<http://inclusive.nise.go.jp/>

インクルーシブ教育システム
構築支援データベース(インクルDB)

※発達障害教育情報センターについて

以下のURLより発達障害のある子どもの教育に関わる情報をお届けしています。

<http://icedd.nise.go.jp/>

国立特別支援教育総合研究所
発達障害教育情報センター

※特別支援教育教材ポータルサイト（支援教材ポータル）について

以下のURLより特別支援教育の教材や支援機器、学校での実践事例をご紹介します。

<http://kyozai.nise.go.jp>

支援教材ポータル

特別支援教育教材ポータルサイト